

調査報告

茨城県かすみがうら市平三坊貝塚発掘調査報告

川島尚宗・村上尚子・鈴間智子

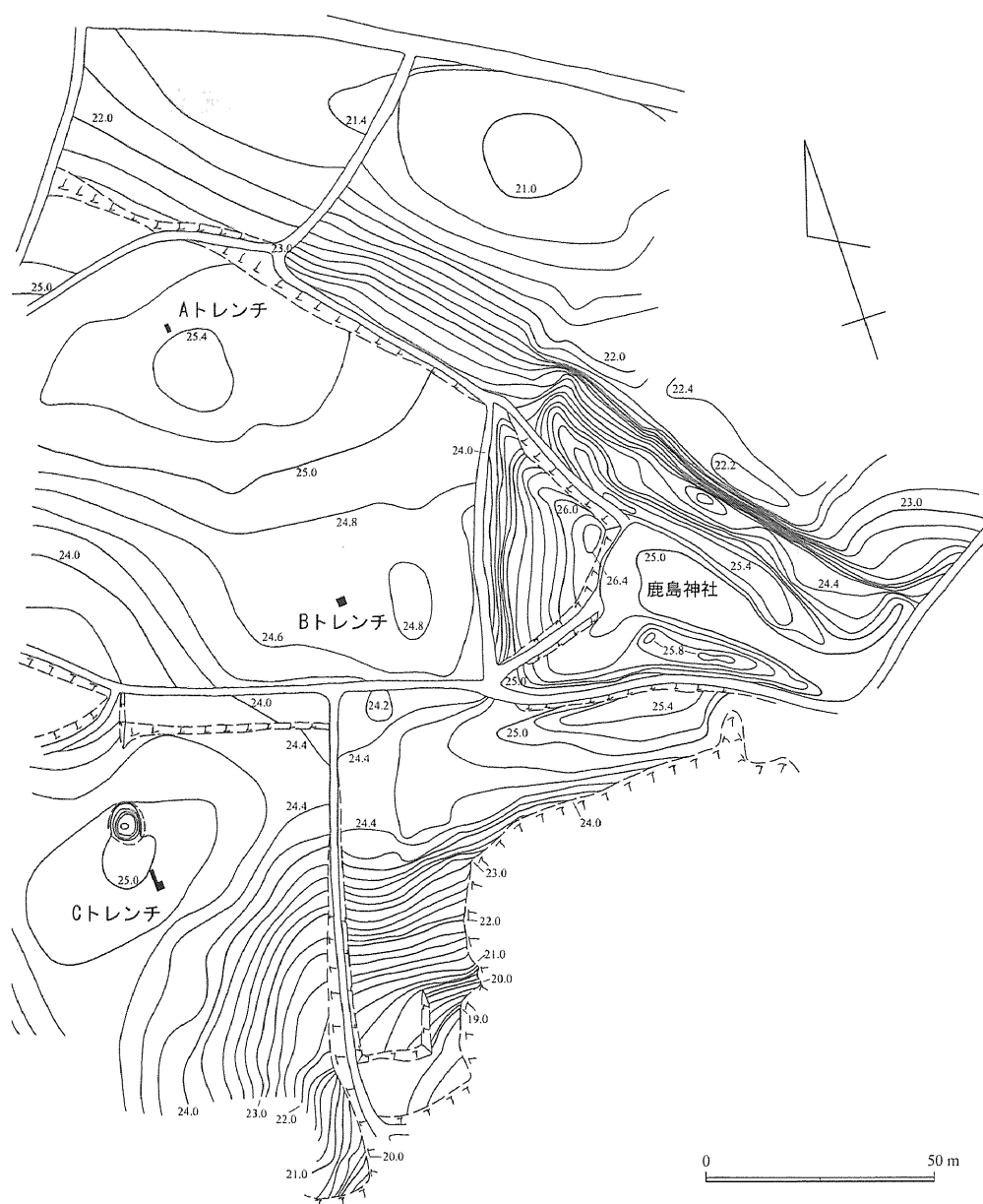
1. 調査の目的

関東地方の縄文時代後晩期集落にはいわゆる「環状盛土遺構」がともなう事例が指摘されており、類例の集成がはかられてきた（江原 1999, 沖松 2005）。しかし、霞ヶ浦周辺では明確な環状盛土遺構の報告はなされておらず、調査例も少ないことから遺跡の詳細な測量図の作成が必要であると判断された。このため昨年度、筑波大学考古学研究室では茨城県かすみがうら市牛渡に所在する平三坊貝塚の測量調査をおこない、現地形や地表面の土色の観察から当貝塚が環状盛土遺構をとともなう可能性を検討した（川島 2007）。しかしながら、環状盛土遺構の存在の有無をより確実に検証するためには、発掘調査によって土層の堆積状況を観察することが必要である。そのため、今年度は小規模ながら発掘調査を実施することとした。これらの調査によって霞ヶ浦周辺地域における後晩期集落と、下総台地や大宮台地などとの比較が可能になると考えられる（川島 2008）。

今回の調査は2007年10月11日から17日まで、考古学実習としておこなった。常木 晃を担当教授とし、川島尚宗、鈴間智子、種石 悠、村上尚子（以上大学院生）、飯塚守人、石川知行、一井悠平、上之真太郎、大村真吾、古藤早人、齊藤 希、只野愛子、辰巳祐樹、田中理恵子、中村真衣子、松島悠史、水乃浦和泉、森 大輔（以上学群生）が参加した。

平三坊貝塚の調査史や周辺の環境については前稿（川島 2007）を参照されたい。今回は、環状盛土遺構の存在を検討することができるようにはトレンチを3ヶ所に設定した（第1図）。表面観察によって盛土部分にあたると考えられる高まりに2ヶ所、中央窪地にあたる部分に1ヶ所トレンチを設定し、遺跡の基本的な層序の把握を試みた。当初、これらのトレンチはすべて1×2mで設定されたが、遺構の検出状況などによって拡張された部分もある。以下、各トレンチごとに検出された遺構と遺物について述べてゆく。なお、文責は文末に記してある。A・Bトレンチは発掘調査時の担当者が執筆したが、Cトレンチは担当者の種石の都合により川島が整理・執筆した。

（川島）



第1図 平三坊貝塚の地形とトレンチの配置（川島2007：第3図に加筆・修正）

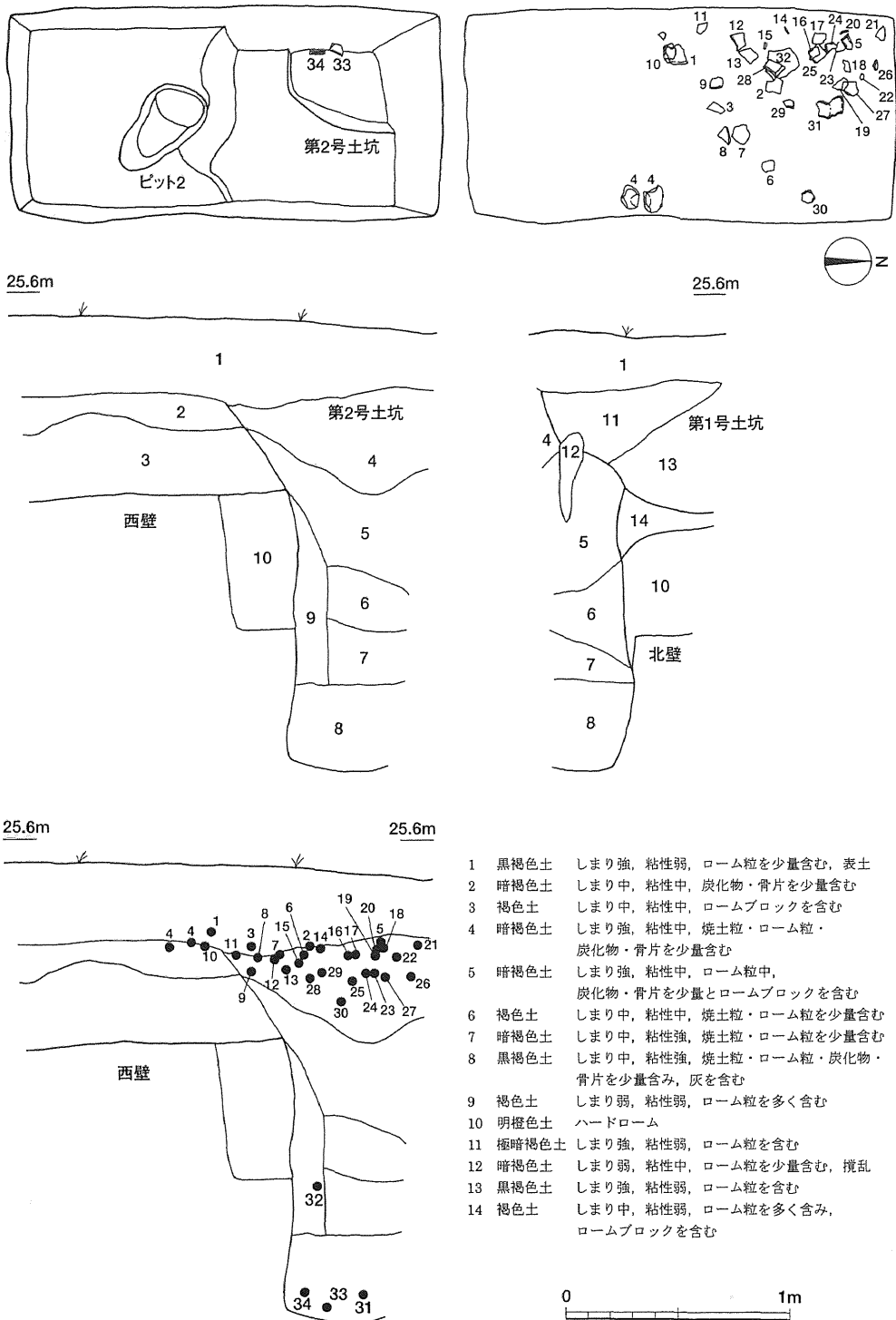
2. 検出された遺構と遺物

2.1. Aトレンチ（第2図・写真図版）

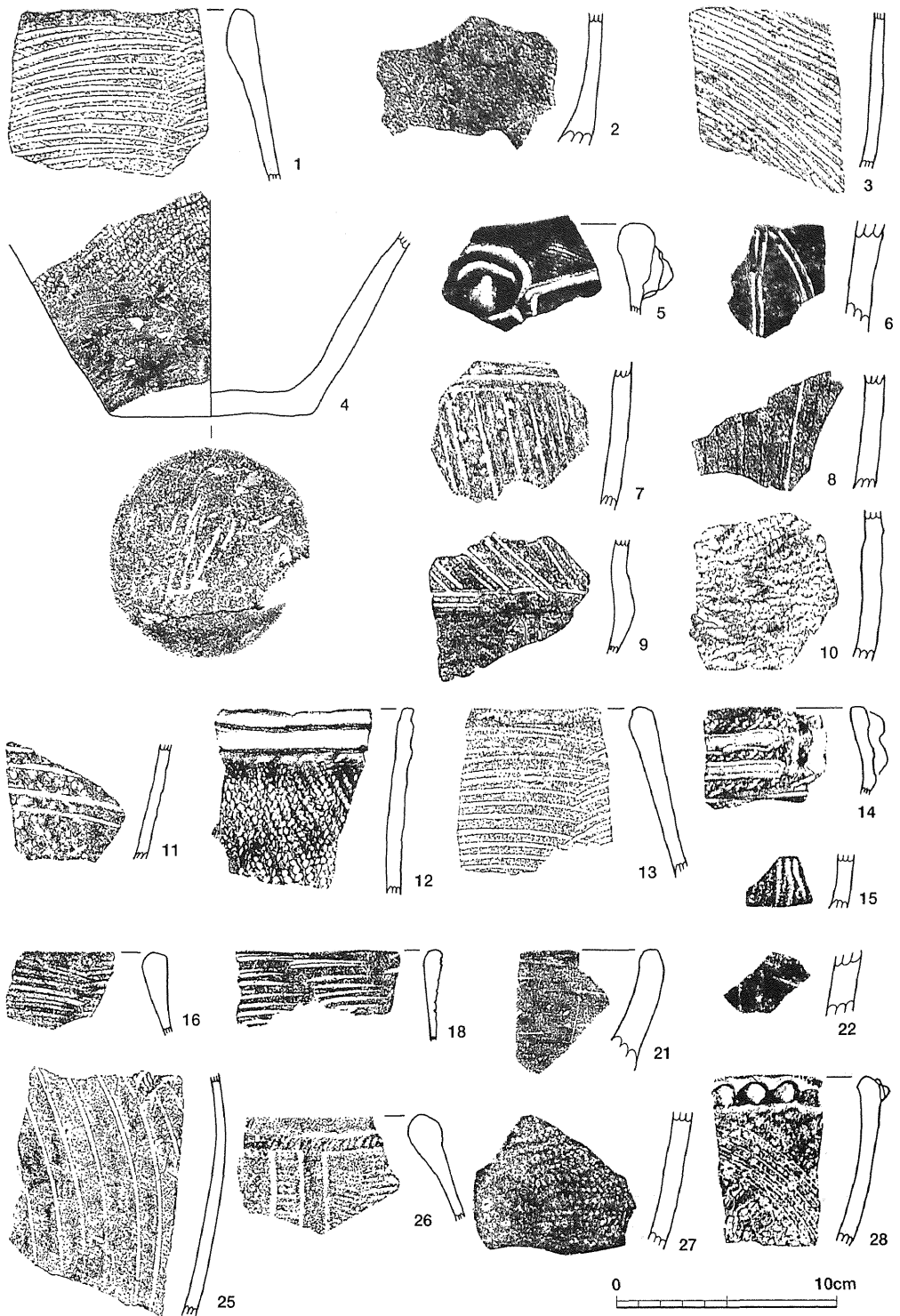
Aトレンチは調査区の北西に設定された1×2 mのトレンチであり、地表面の標高は約25.5mである。Aトレンチの現況は畑地脇の通路部分であるが、以前は耕作されていたと考えられ、地表面から30cm程度は耕作によると考えられる攪乱が確認された。Aトレンチからは

縄文時代後期の土器を中心とする遺物が出土した。第2号土坑からは縄文土器が出土したが、第1号土坑・ピット2からは遺物がほとんど出土していない。第1号土坑はトレンチの北東、地表面から40cmで検出した。南北25cm、東西50cm、深さ50cm程度の楕円形の土坑である。北壁の断面図から本土坑が第2号土坑を切っていることが確認される。第2号土坑はトレンチの北西隅、地表面から約40cmの深さで検出された。南北50cm、東西30cm、確認面からの深さ160cm程度の楕円形のピットで、約1/4が検出された。遺物は4層から集中して出土している。平面図からも遺物の分布が本土坑の上部にあたと判断され、本土坑にともなう遺物であると考えられる。土坑の最下部では骨や灰を比較的多く含む層が確認された。出土土器から時期は後期後半と考えられる。ピット2はトレンチの中央部、地表面から80cmの地点で確認された。南北20cm、東西30cm、深さ40cm程度の楕円形のピットである。ピットから遺物がほとんど出土せず、不整形であったため木の根の跡であると考えられる。

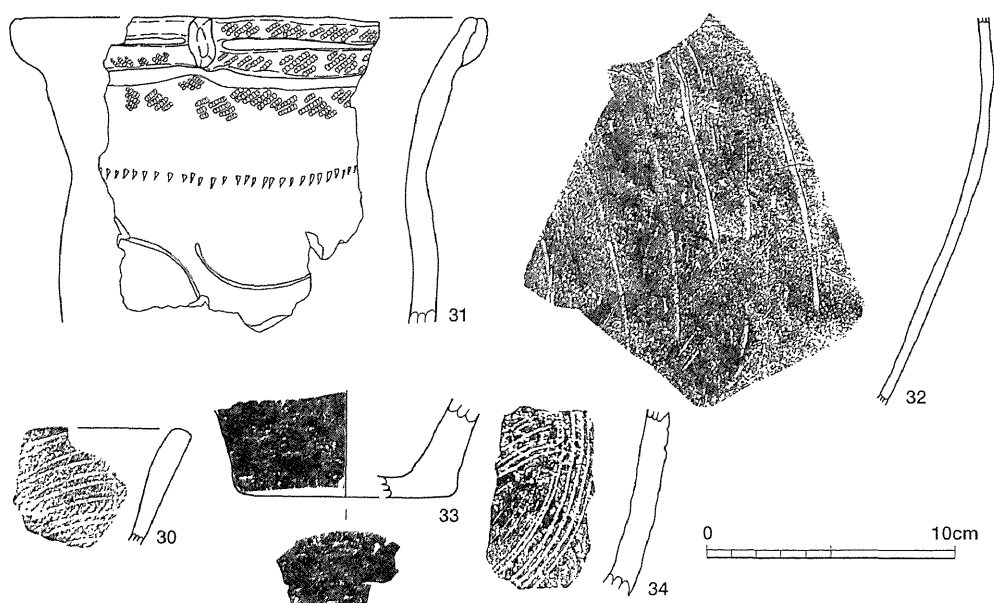
A トレンチから出土した土器は第3～5図に示した。1～34は出土位置が記録された土器片であり、第2図と対応する。なお、17・19・20・23・24・29は製塩土器と考えられ、B トレンチ出土のものとあわせて後述する（第15図）。1は安行式の粗製土器である。ヘラケズリの後に、横位の条線が施される。2は底部付近の破片である。3は安行式の粗製土器の胴部片である。斜位の条線が密に施される。4は底部径9.3cmの底部片である。底部直上には横方向のナデが施され、その上部に縄文が施されている。5は安行式の口縁部片である。口唇部は肥厚し縄文が施され、突起が付される。突起から右下にのびる細い隆帯には刻みが施される。6は胴部片であり半截竹管状工具による文様が施される。7は胴部片である。半截竹管状工具によって横位の区画がなされ、縦方向の沈線が連続して施される。内面には剥落痕が認められる。8は底部付近の破片である。外面には縦方向のヘラナデが施される。9は胴部片であり、屈曲部の上部に半截竹管状工具により、区画と斜位の沈線が施される。10は胴部片であり、外面には大きめの縄文が施され、内面は丁寧なナデが施されている。11は粗い縄文が施され、条線が施される胴部片である。12は口縁部に沿って2本の沈線がめぐり、胴部に縄文が施文される。13はやや内傾する口縁部片であり、条線が施される。14は縦長のキザミのない瘤が施される口縁部片である。水平な隆帯上に縄文が施される。隆帯直下には沈線がめぐらされる。15は半截竹管状工具による沈線が施されている。16は内傾する口縁部片で条線が施される。18はほぼ直立する口縁部片である。短めの条線が施される。21は無文の口縁部片である。胎土には1～2mmほどの赤色砂粒が含まれる。25は最大径付近の胴部片であり、上端に紐線文の一部が認められる。斜位の条線が施される。26は沈線によって縦位の区画がなされた後に、紐線文が施されている。28は口縁部外面に紐線文が付され、縄文施文後に櫛歯状工具によって斜位の沈線が施される。第4図30は外反する口縁部片であり、縄文の後条線が施文されている。31は胴部中央でくびれ口縁部が外反する土器である。口縁部に2条の隆帯が作り出され、縦長の突起が付される。隆帯およびその直下には縄文が施されている。くびれ部には三角の刺



第2図 Aトレンチ



第3図 Aトレンチ出土遺物 (1)

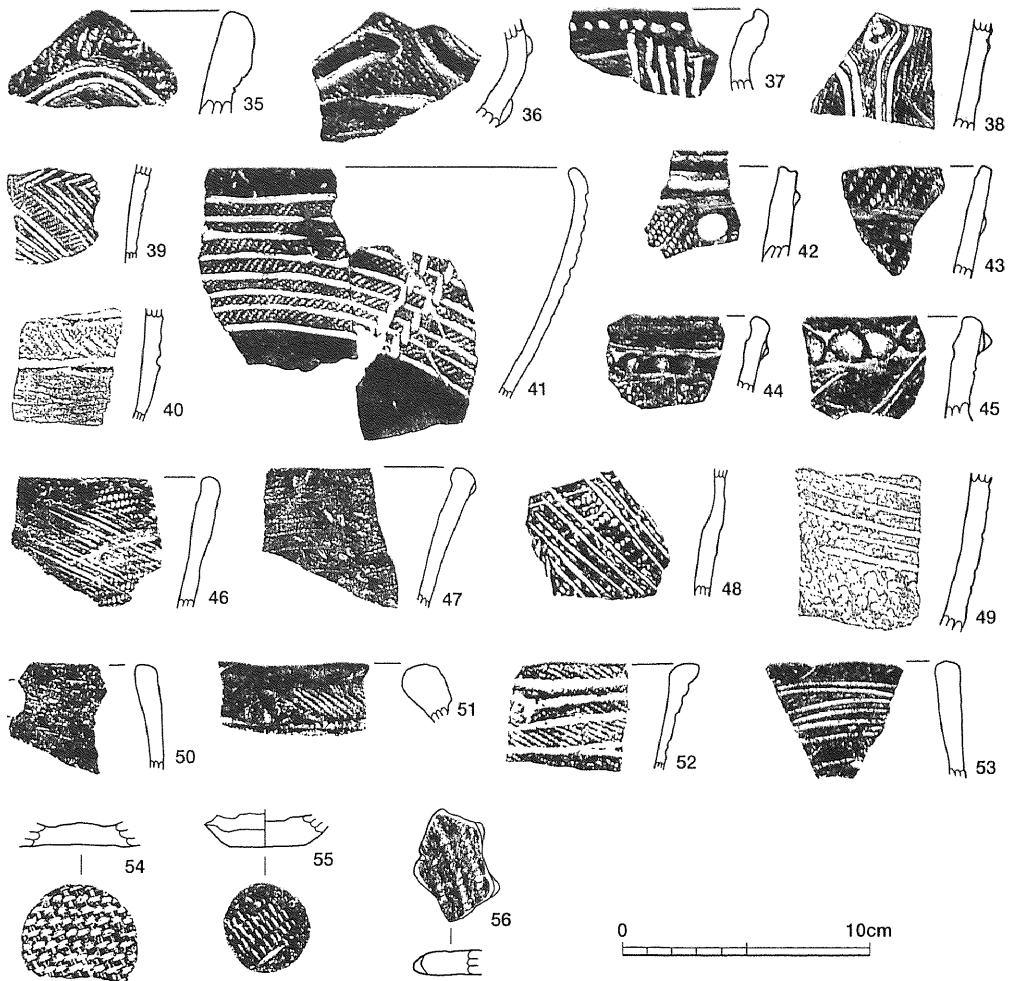


第4図 Aトレンチ出土遺物 (2)

突がめぐり、胴部下半には沈線で曲線が描かれる。32にはケズリが施され、条線が施文されている。33は底部片であり、復元径9.0cmをはかる。34には櫛歯状工具によって沈線が交叉するようにひかれている。内面は丁寧なナデが施される。

第5図35は波状口縁の波頂部である。縄文が施される隆帯下に半截竹管状工具による沈線がめぐる。36は縄文が地文として施され、隆帯が付される。37は口縁部に沿って円形の刺突がめぐる、数条の沈線が垂下する。38は垂下する隆帯に沿って2本の沈線がひかれている。隆帯自体は剥落しているが、円形の刺突付近の部分は残っている。地文は縄文である。39は集合的な沈線によって三角状の文様が描かれ、その間に縄文を施す。40は沈線間に縄文が施されている。41は鉢であり、水平に数条の沈線がめぐる、縄文が施される。水平方向の沈線をつなぐように、縦の短い沈線が階段状に施される。42は細い紐線文が施される口縁部であり、口唇部上面に浅い沈線がめぐる。補修孔が認められる。43にも細い紐線文が施され、この上部に縄文が施される。44・45には紐線文が施される。43～45の口縁部内面には沈線が施されている。46～49は縄文と条線が施される土器である。46の口縁部内面には沈線が施され、47には段差がある。50は無文の口縁部片であるが、焼成前の穿孔が施されている。51は内湾する口縁部片で、縄文が施される。52は沈線で三叉文が描かれる。53には条線が施される。54・55は底部片であり、網代痕が残る。55の復元径は3.2cmである。56は土器片錘であり、13.6gをはかる。

第5図の土器のうち第1号土坑より出土したのは41・47で、第2号土坑からは39・42～45・48・50・52・53・55が出土している。(鈴間)

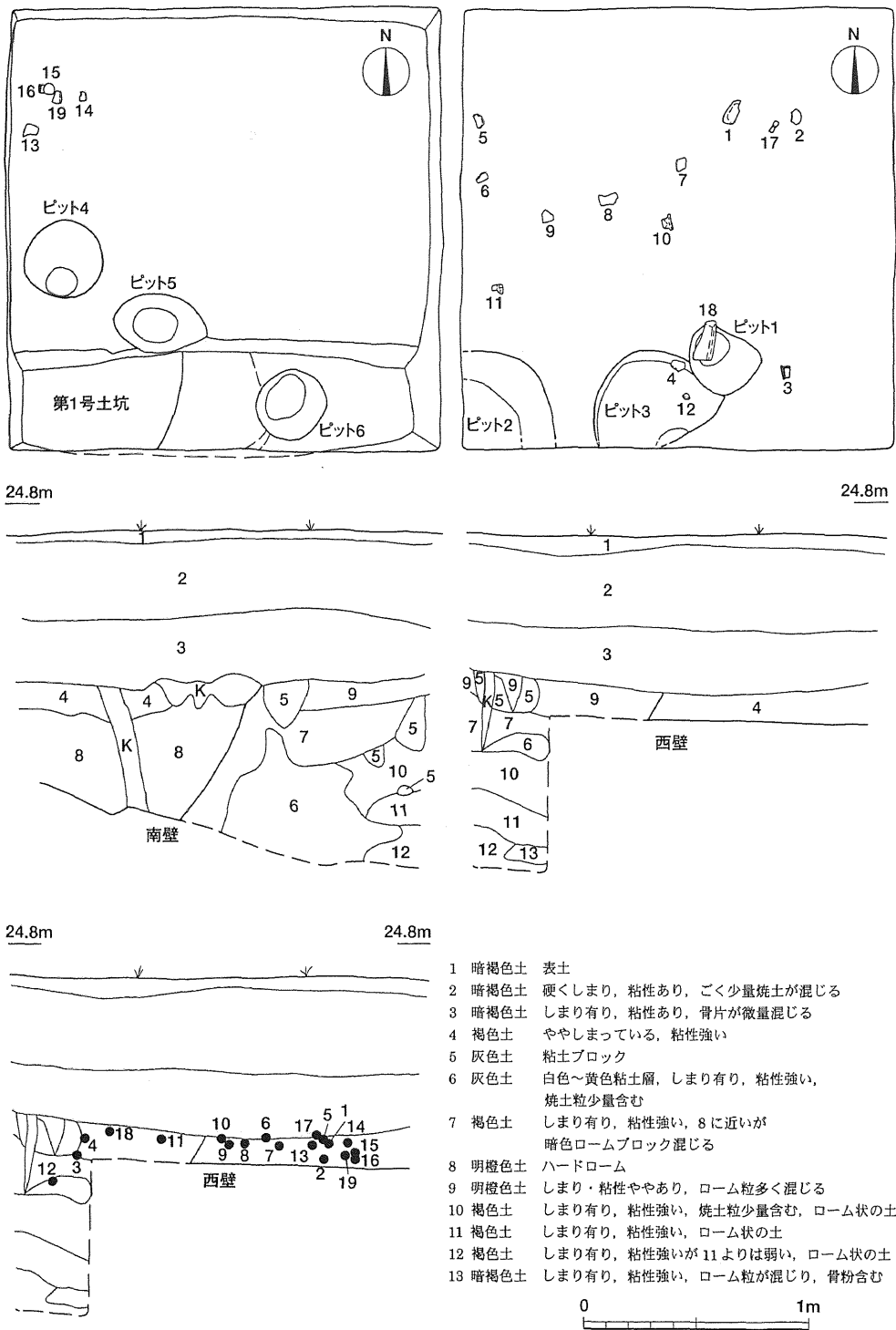


第5図 Aトレンチ出土遺物 (3)

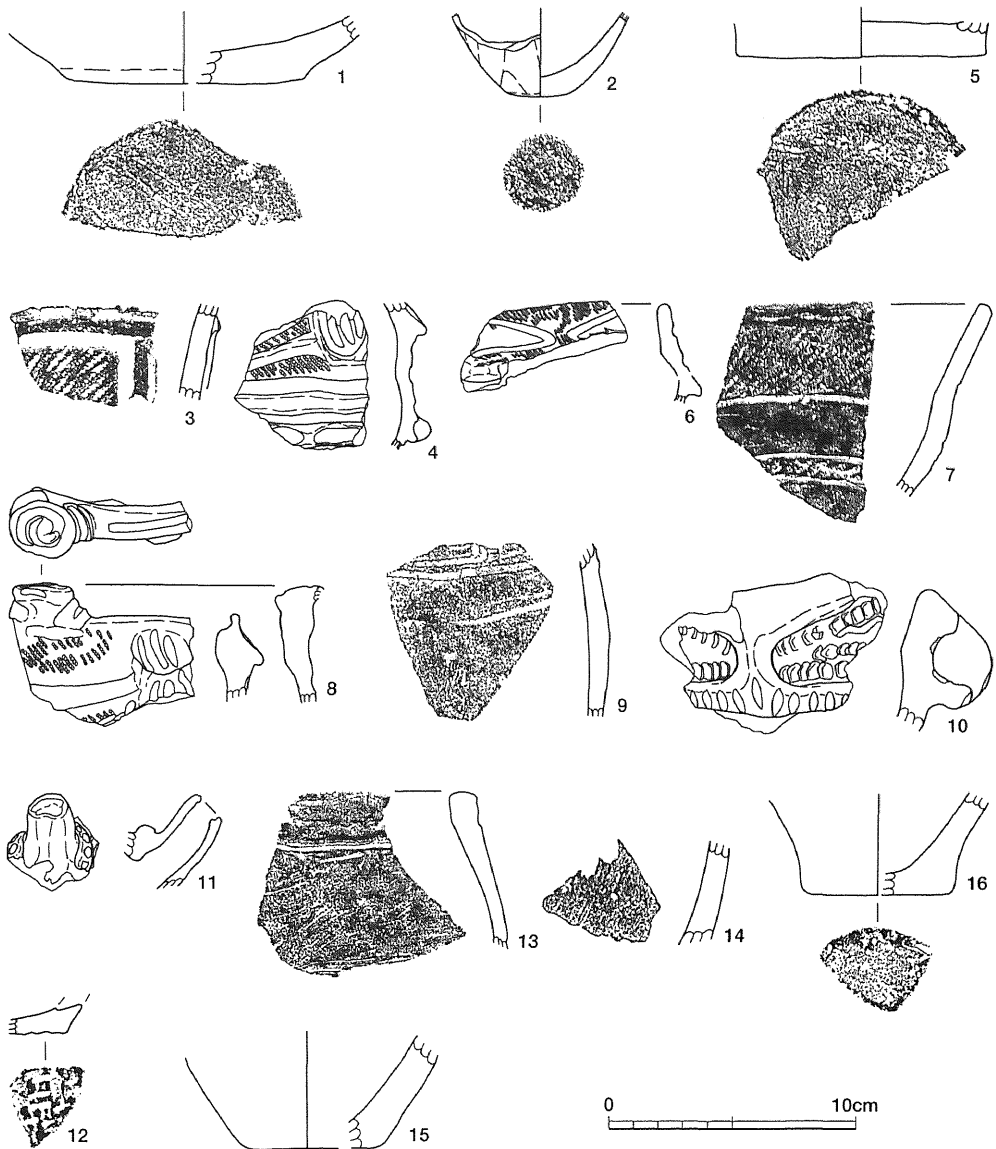
2.2. Bトレンチ (第6図・写真図版)

Bトレンチは遺跡中央に位置し、昨年度の測量調査で窪地部分と推定された地点である。地表面の標高は24.65mである。Bトレンチは西へ1×2m拡張したため最終的に2×2mとなった。また、南壁に沿って幅50cmのサブトレンチも設けている。Bトレンチを設定した付近は現在耕作がおこなわれていないが、以前植木畑であったとされており攪乱を受けていると考えられる。トレンチ西半では比較的良好な土層の堆積が観察された。遺構は全部で5基検出され、すべて3層付近で確認された。出土遺物は縄文時代中期前半から晩期中葉の土器、石鏃・石棒・石皿などの石器であった。

ピット1はトレンチの南東、地表面から約65cmの3層上部で検出された直径約30cmの浅い円形のピットである。深さは確認面から約17cmで、覆土は黒褐色土である。このピットから

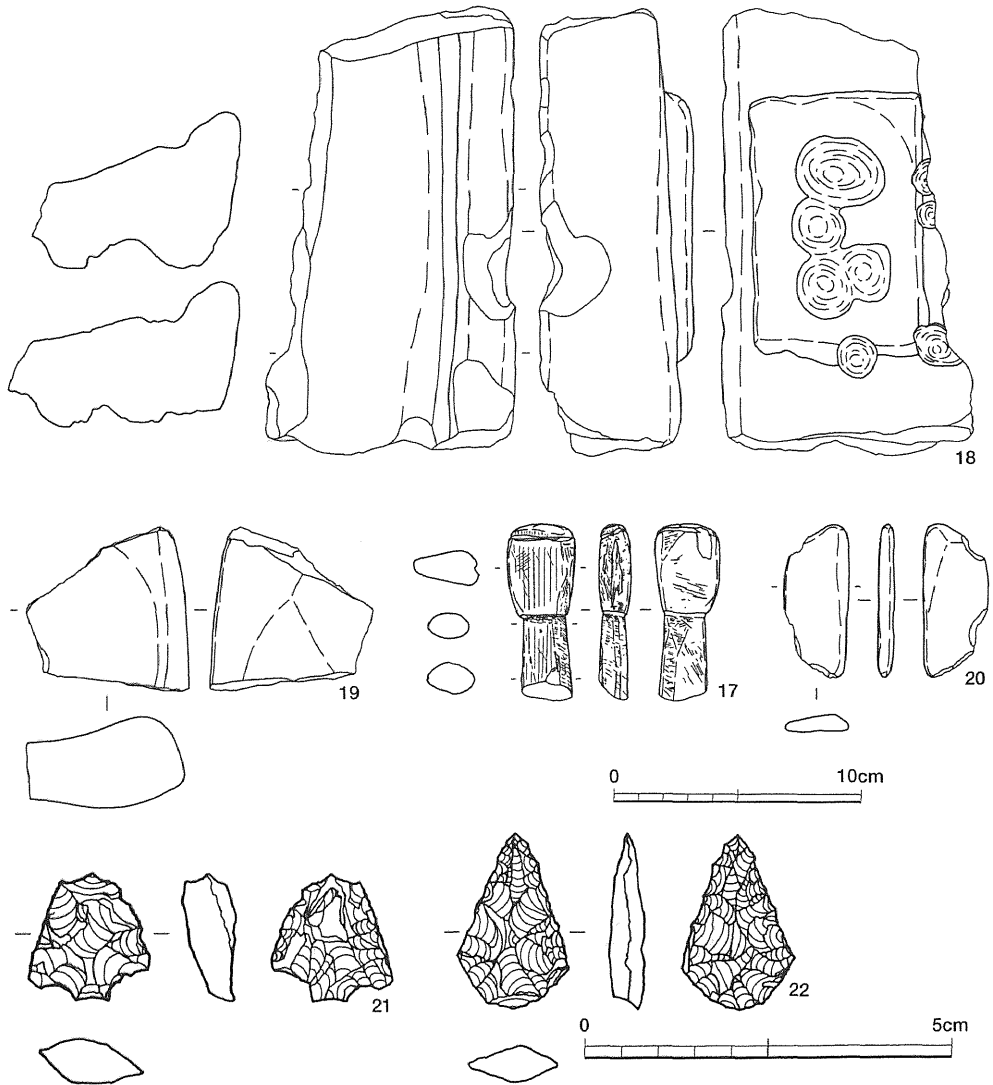


第6図 Bトレンチ



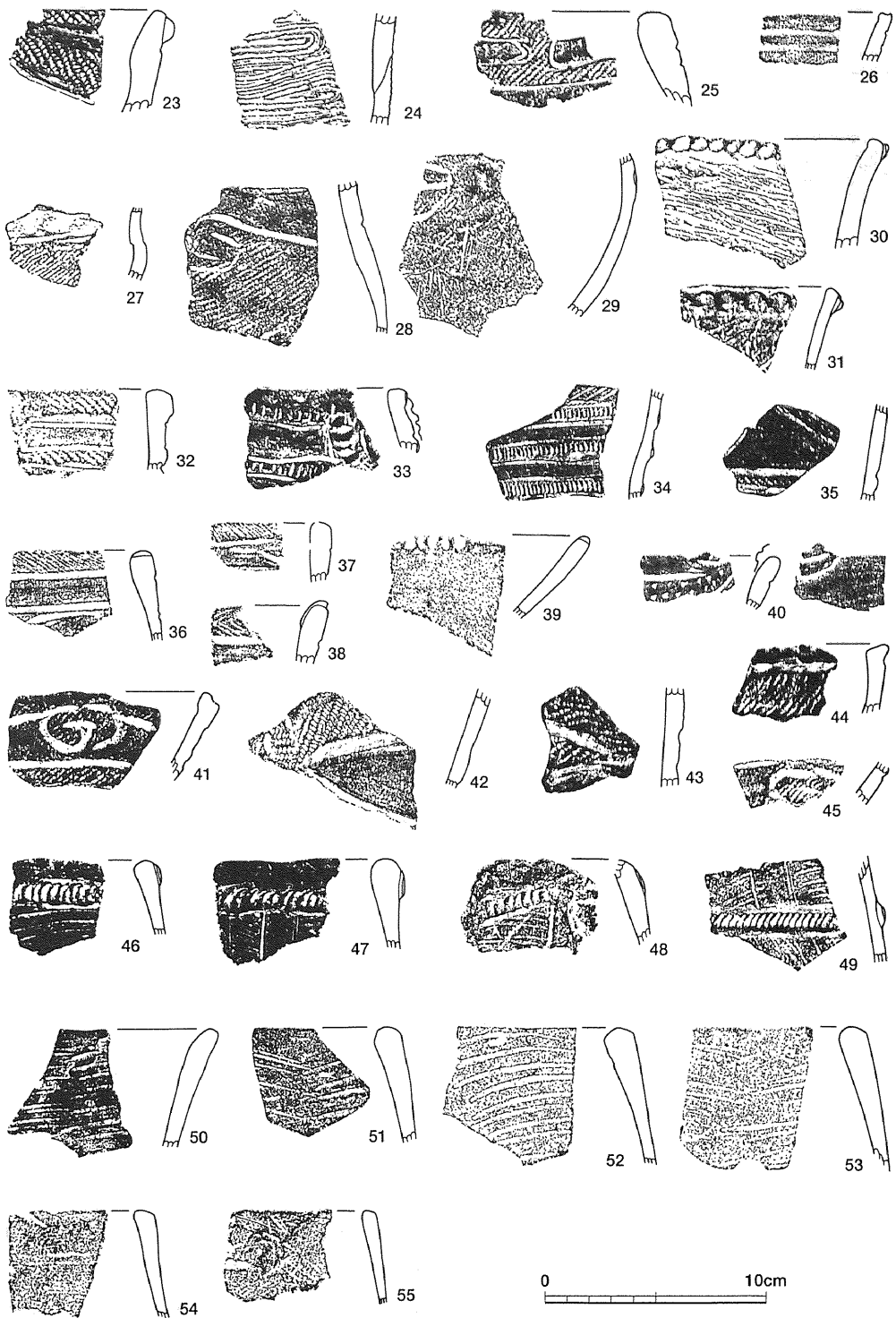
第7図 Bトレンチ出土遺物 (1)

方形有脚石皿の破片が出土している（第8図18）。地表から約65cmの深さにおいて灰白色の粘土がトレンチの南部分に約20cm四方の範囲で検出され、これをピット2とした。この粘土には土や根がほとんど混じっておらず、自然な堆積によるものではないと推定される。粘土の範囲は、西へ広がっていると思われたため、範囲を確定するためにトレンチを西へ1m拡張した。また、トレンチの南部分で確認された粘土の範囲を確定し、これをピット3とした。ピット3は約40×50cmの範囲に粘土がみられ、南へ広がっていると思われた。ピット2・3は、3層下

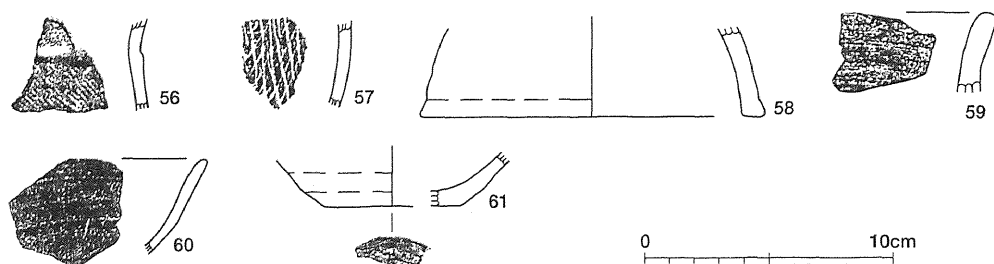


第8図 Bトレンチ出土遺物 (2)

のハードローム層が確認されたレベルより深く掘られており、深さを確定するため、南側に幅50cmのサブトレンチを設定した。サブトレンチは東側を約23cm、粘土が分布する範囲と考えられる西側を約65cm掘り下げた。その結果、当初はピット2・3を別々の遺構と考えていたが、ピット間からも粘土が確認されたことから、ピット2・3を含めて一つの土坑であることが判明し、第1号土坑とした。第1号土坑はローム状の土や粘土ブロックを多く含んでいるが出土遺物は少ない。本土坑は掘りきることができなかったため、推定範囲内をボーリングステッキで調査したところ、もっとも深い西端で確認面から約110cmの深さが確認された。土坑の範囲を西壁・南壁の断面から推定するとフラスコ形を呈し、直径約1.2m、土坑の下部では約2mの



第9図 Bトレンチ出土遺物 (3)



第10図 Bトレンチ出土遺物 (4)

規模と考えられる。ピット4はトレンチの西側の地表から約68cmの深さで検出された。直径約35cm、確認面からの深さ約50cmの円形のピットである。ピット5はピット4の南東約15cmの地点でピット4と同レベルで検出された。南北約27cm、東西約40cmの楕円形をしており、深さは確認面から約28cmである。ピット6はトレンチ南東にて、地表から約71cmで確認された。直径約30cmの円形であり、深さは確認面から約22cmであった。覆土は黒色土である。粘土ピットの東部分と切りあっている。

Bトレンチの出土遺物は第7～10図に示し、第7図1～16および第8図17～19は第6図と対応する。1は底部片であり、復元径は9.8cmをはかる。緩やかに立ち上がる器形である。2は底部片である。復元径は2.6cmである。内面の調整はナデ、外面および底面はヘラケズリである。製塩土器であろうか。3は隆帯が施される胴部片である。胎土には雲母が多量に含まれる。4には縦長の刺突をもつ突起が付される。器面にはミガキが施される。破片下部に設けられた窪みをもつ隆帯には赤色塗料が残る。5は底部片で復元径が10.2cmである。6は口縁部が内傾する浅鉢であろう。口縁部には入り組み文が施され、その下部に連続した突起が設けられる。7は外反する口縁部の破片である。口縁部と屈曲部に縄文が施文されている。8は上面に渦巻き状の浅い沈線をもつ突起が付され、その両端に短い隆帯が施される。この片方の隆帯には浅い沈線が施される。口縁部下には縦長の刺突をもつ突起が2段付される。この突起や器面の調整から4と同一個体であると考えられる。9は胴部片である。横位の浅い沈線が施され、その上部に2本の浅く短い沈線が施されている。胎土には細かい砂粒が多く含まれている。10はキザミをもつ立体的な隆帯が施される口縁部である。隆帯で区画された内部には連続した角押し文が施される。胎土に雲母と長石を多量に含む。11は注口土器の注口部であり、付け根の上部に円形の刺突をもつ隆帯が施される。12は底部片である。網代痕が認められる。13は口唇部下と破片下端に沈線が認められ、杵状文と考えられる。外面の調整はケズリである。14は無文の胴部片である。15は底部片である。16は底部片であり、復元径は6.4cmをはかる。

第8図17は石棒の頭部片である。残存長7.0cm、頭部の幅2.7cm、厚さ1.4cmをはかる。18・19は石皿である。18は方形で縁を有し脚部をもつ。裏面にはいくつかの窪みを有する。

残存長17.8cm、高さ6.3cmである。脚部は10.4×6.9cmで、高さ1.2cmをはかる。石材は多孔質の安山岩である。19は両面に研磨痕をもち、石材は砂岩と考えられる。20は砥石である。石材は砂岩である。21・22は石鏃である。21は先端部と基部を欠き、1.5gをはかる。石材は流紋岩と考えられる。22は基部を欠き、1.5gである。石材はチャートであろう。

第9図23は口縁部に隆帯が付され、縄文が施されている。24は櫛歯状工具によって波状の文様が描かれる。25は沈線間に縄文が施されている。26は口唇部上面と口縁部外面に沈線がひかれており、破片下部に縄文が施されている。27はくびれ部付近の胴部片である。水平方向の沈線がめぐりその下部に縄文が施文される。28は沈線によって入り組み文が描かれ、縄文が施される。29は低い瘤が付され、その両脇から沈線がのびる。30・31は紐線文が施され、口唇部内側に浅い沈線がめぐる。縄文と条線が施されている。32は浅い隆帯に縄文が施されている。隆帯下には沈線がめぐる。33にはキザミのある瘤が付され、隆帯にも連続したキザミが施されている。34は低い隆帯上にキザミが施されている。破片上部には斜位の沈線が認められる。35は低い隆帯に縄文が施されており、隆帯に沿ってやや幅広の沈線がひかれる。36・37は口唇部に細い沈線が充填される。36には口唇部上面の端に細く深いキザミが1本認められる。37の口唇部外面にも細い沈線が充填されるが、矢羽状の構成をとる。口縁部内側に粘土紐が付される。39は口唇部に幅広のキザミが施される浅鉢である。40は突起を有する口縁部片である。外面には沈線間に2列の刺突列が施される。41～43は幅広で浅い沈線と縄文が施される。41には「の」の字状の文様が描かれる。44は口唇部外面に細かな突起が付され、胴部に縄文が施される。45は縄文が施された部分の周囲に彫刻的な調整を施す。46～48は口唇部が肥厚し、紐線文が施される土器である。49も同様であろう。48の紐線文は左下へのびている。47～49には縦に区画された無文部分がある。50～53には条線が施される。54・55は口唇部の肥厚が顕著ではなく、無文である。

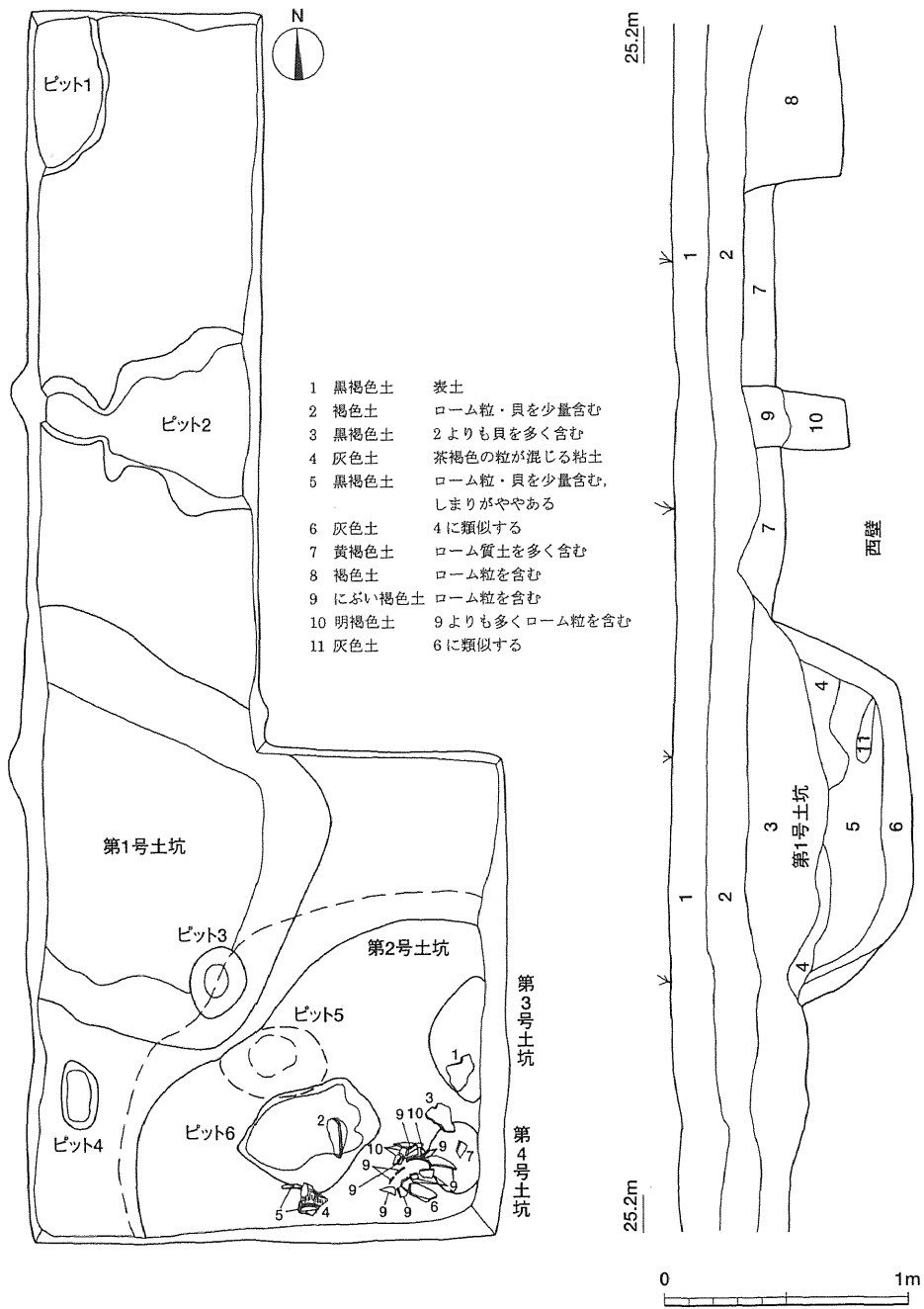
第10図56は胴部のくびれ部付近の破片である。胴部に撚糸が施文される。57には撚糸が交叉するように施文される。58は台付土器の台部である。59は須恵器、60・61は土師器であり、両者とも内面が黒色処理されている。

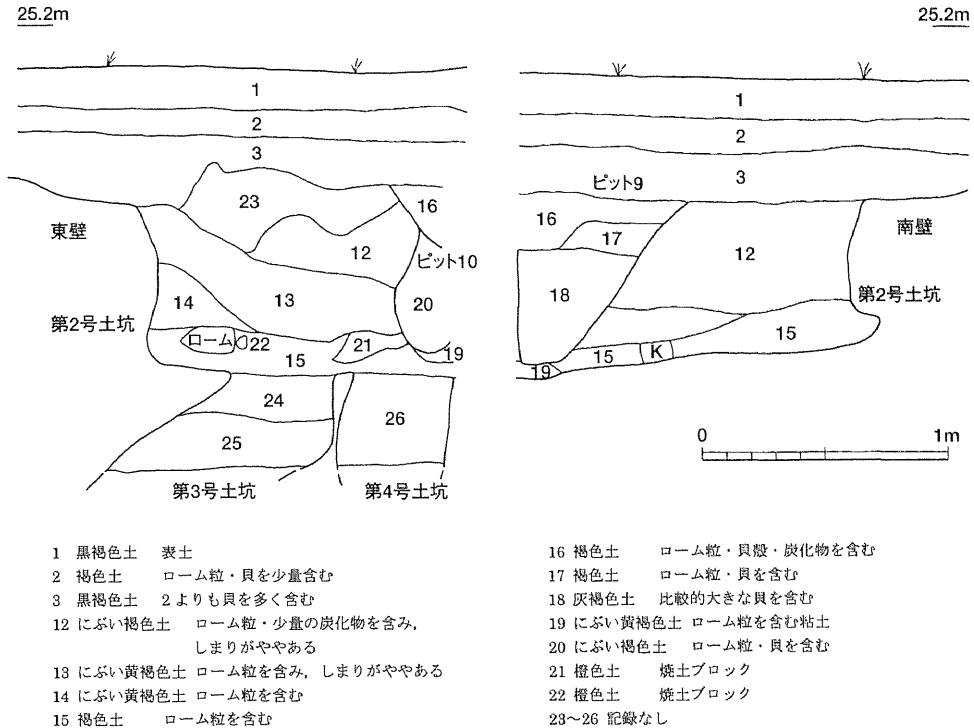
第7図4はピット1より、第7図12・第9図45はピット3より、第9図29・第10図56はピット5より出土した。

(村上)

2.3. Cトレンチ (第11・12図)

Cトレンチは北側へ2m拡張し、南側にも3m拡張した。Cトレンチからは中世以降と考えられる粘土貼り土坑と、縄文時代中期の袋状土坑を含む3基の土坑が検出された。ピット1・2・4は木の根による攪乱と考えられる。第1号土坑はCトレンチ南側で検出された。確認面でのプランは最大幅で1.4m、底面は最大幅で0.9m程度をはかり、長さは1.3m以上になる。断面は逆台形状を呈し、平面形は長方形を呈すると考えられる。土坑上面からは最深部で約



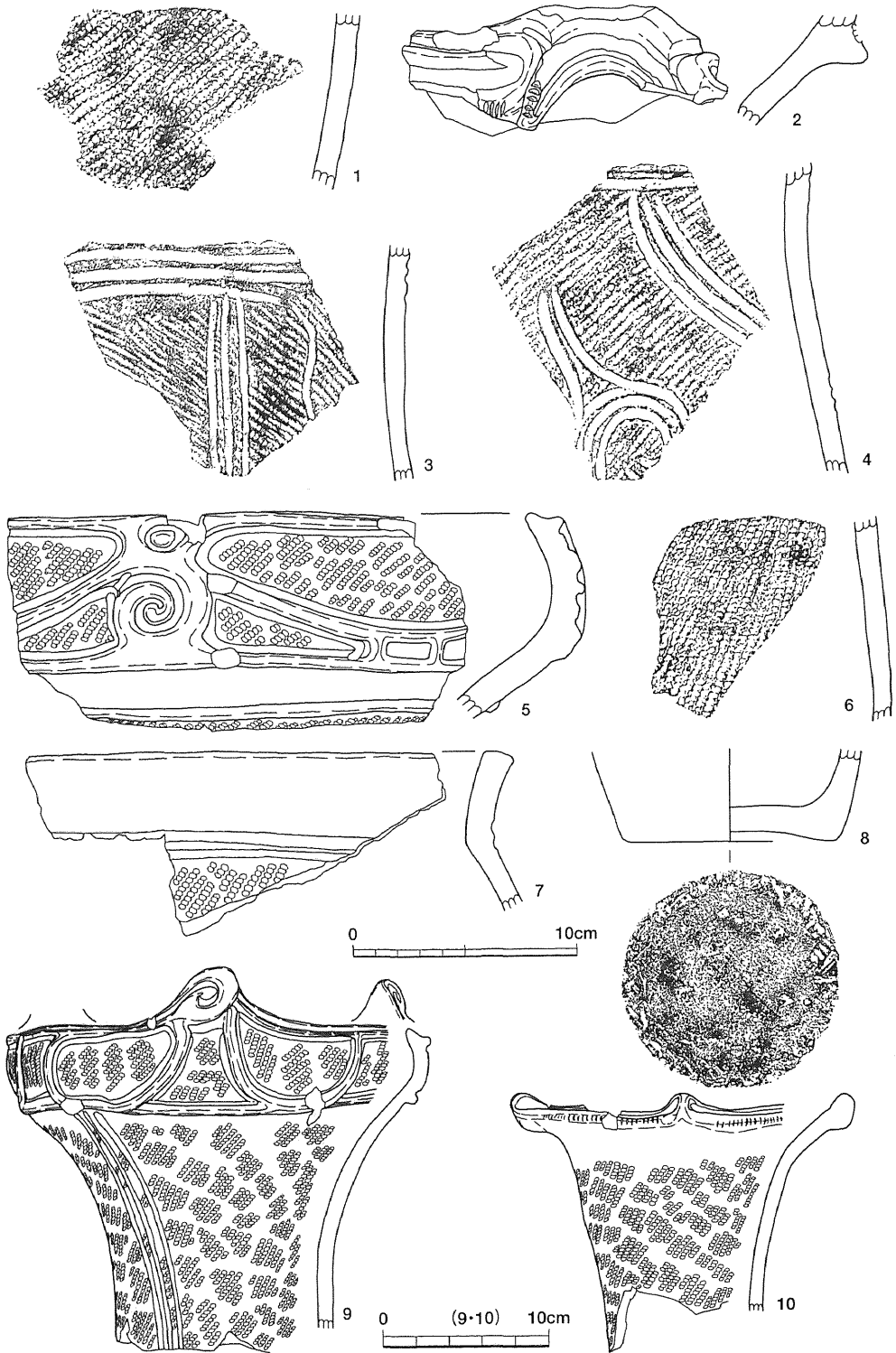


第12図 Cトレンチ (2)

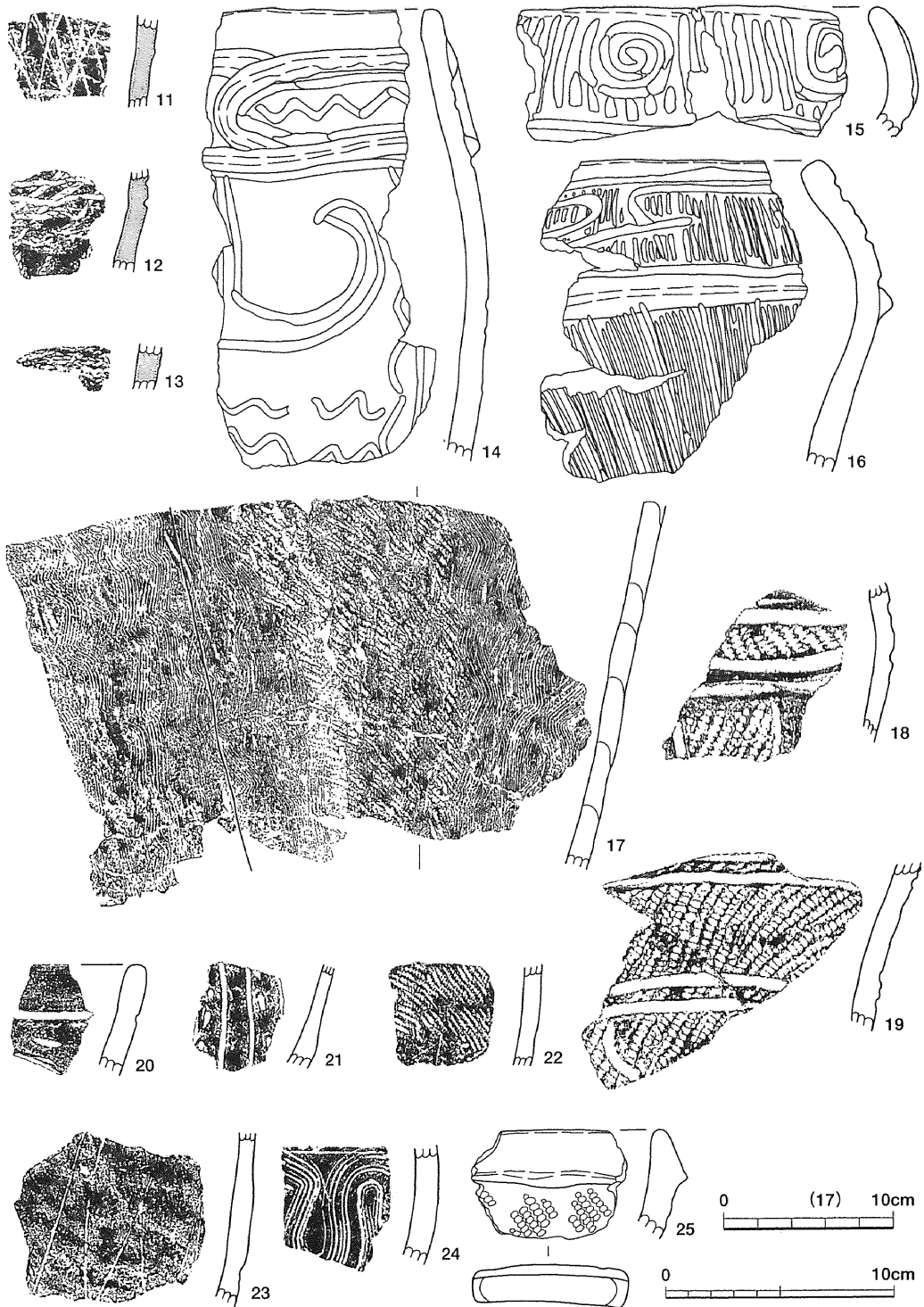
40cmをはかる。土坑の壁は外傾しながら立ち上がる。底面および壁には2～15cmの厚さでロームが若干混じる粘土が貼られており、土坑の覆土中にも同様の粘土がほぼ同じ厚さで2～3層確認された。一定期間の使用後、土坑の底面に粘土を貼り直す行為が想定されるが、水が溜まっていたような痕跡は確認できなかった。第1号土坑からは縄文時代中期の土器片と貝が出土したのみで、遺構の時期を示す遺物は出土していない。ピット3は第1号土坑最下部の粘土層をはがした段階で検出したとされるが、第2号土坑の一部を誤認したものであろう。

第2号土坑はCトレンチ南東隅で検出された。土坑の下部が広がる袋状土坑と考えられる。復元値で、底面径は3m近くをはかり、検出面からの深さは最大で75cmある。底面中央付近では、長軸60cm、短軸50cm、深さ15cmの不整楕円形のピット6が検出された。また、覆土中15層の上面において東壁に接する焼土層（21・22層）が検出された。21層は直径約30cm、厚さ13cmで、22層は直径約10cmであった。本土坑の時期は出土した土器から加曽利EI式期と考えられる。第2号土坑の覆土にはピット9（16～18層）とピット10（20層）が掘り込まれている。

また、本遺構底面のトレンチ東壁付近からは、さらに2つの土坑が隣接して検出された。第3号土坑は検出面の径が約70cmをはかり、第4号土坑は40cm以上と考えられる。第3号土坑では検出面から15cmほどの深さで混土貝層（25層）が確認された。土坑の下部が広がってお



第13図 Cトレンチ出土遺物 (1)



第14図 Cトレンチ出土遺物 (2)

り、フラスコ形を呈すると考えられる。第4号土坑でも検出面から35cmほどの深さで混土具層（26層下部）の堆積が認められた。第3・4号土坑は完掘していない。

Cトレンチの出土遺物は第13・14図に示した。第13図に示した土器は出土位置が基本的に図化されたものである。第13図1は縄文中期の胴部片である。2は口縁部下端の部分であり、胎土に雲母を多量に含む。3・4は胴部片であり、3本の沈線によって区画がなされ、同様の工具によって垂下する沈線や曲線の文様が描かれている。5は口縁部片で復元径は47.2cmをはかる。口縁部は隆帯によって区画され、渦巻文様が施される。頸部は無文となり、胴部には縄文が施されている。6は胴部下半の破片である。7は外反する口縁部片である。口縁部は無文となり、屈曲部に2本の沈線が施される。8は底部片であり、底部径は9.7cmをはかる。上げ底状を呈し、底面の縁には網代痕が残る。9は3単位の突起をもつ。口縁部は隆帯によって区画され、突起部分に渦巻文様が施される。胴部には3本の沈線が垂下する。10は4単位の突起を有する土器である。口縁部上端に隆帯がめぐり、連続する刻みが施されている。第13図の土器は23.940～24.231mの高さで出土しており、第12図の第2号土坑12層の下部から13層から出土したと考えられる。

第14図11～13は胎土に繊維を含む土器片である。14は口縁部に隆帯による区画がなされ、波状の沈線が施されている。胴部にも同様に波状の沈線や曲線によって文様が描かれる。15・16はキャリパー形の土器の口縁部片である。どちらも縦位の沈線が充填されているが、15の沈線の方が太くなっている。15には渦巻文様が施される。17は櫛歯状工具によって縦方向に波状の文様が施文されるが、縄文が施される部位もある。18は口縁部が低い隆帯で区画されており、胴部に磨消帯が垂下する。19は2本一組の沈線で横位の区画がなされる胴部片である。20・21は沈線によって文様が描かれ、その間に細長い刺突が連続して施される土器片である。22は縄文が施される胴部片である。23は細い沈線が格子状に施される胴部片である。24には櫛歯状工具によって曲線が描かれている。25は土器片錘であり、重量は59.9gをはかる。口縁部片を用いており、切り込み部分以外は研磨されていないようである。第14図の土器のうち14はピット5・6より、16・17は第3号土坑より出土した。

（川島）

3. 出土遺物の検討

3.1. 有縁有脚方形石皿

Bトレンチから出土した石皿（第8図18）は有縁有脚であり、なおかつ方形を呈すると考えられ、出土例が少ないので検討を加えておこう。この石皿はBトレンチのピット1から出土しており、同ピットからは第7図4も出土している。

石皿の主要な属性のひとつは平面形であるが、実際には同一地域・時期においても様々な形態が存在していることから、平面形のみでは時期を決定することはできない（赤塚 2001：

141)。ここでは平面形・縁・脚という要素をもとに、類例の形態から当貝塚出土石皿の時期を推定してみよう。先行研究によると有脚石皿の大部分は中期末から後期前葉に属するとされる（赤塚 2001：141）。赤塚は脚の形状から次の3分類をおこなった。第1は「樺山タイプ」であり、平面形が方形を呈し、4辺とも縁を有する。脚は4隅から長辺に沿って弧状にのびる隆帯上に設けられる。脚部自体は方形または円形である。時期は縄文中期末から後期初頭とされる。また、「準樺山タイプ」とされる石皿は不整な形状となり、脚部の隆帯も平行に近い配置となる。第2に掃き出し口と肩部をもつものがあり、長辺は直線的で縁が3辺に設けられる。短辺が両方とも弧状を呈する例もある。俵型とも表現できよう。円形または方形の脚が4つ配置される。前期後半の例もみられるが脚はなく、脚部が出現するのは中期前葉であるとされる。第3に三脚状の脚部をもつ石皿である。脚部の形状はほとんどすべてが円形となり、縄文中期の範囲におさまるとされる。

平三坊貝塚例の脚部は隆帯をもっていないので、樺山タイプには該当しない。また、脚部が方形であることから、三脚の可能性は薄い。したがって、第2の掃き出し口や肩部をもつタイプに相当すると考えられる。関東地方の類例をもとに当貝塚出土石皿の時期を検討してみよう。当貝塚周辺の類例を求めると、茨城県内では中妻貝塚例と冬木貝塚例が有縁有脚である。また、他地域においては赤山遺跡（埼玉県川口市）や貝の花貝塚（千葉県松戸市）から出土した石皿が後期前半とされている（赤塚 2001）。貝の花例には肩部が付されるのに対し、赤山例には肩部がみられない。東関東の出土例と赤塚（2001）が提示したほかの地域の出土例と比較すると、当貝塚出土例は掃き出し口と肩部をもつ形態に分類できるだろう。掃き出し口と肩部をもつ石皿の分布域は関東甲信越と推定され、周縁部ではあるが当貝塚も分布域に含まれると考えられよう。

有縁有脚という形態は平面形態が方形であることと相関し、中期後葉から後期前半の東北から関東地方に広く分布することが指摘されている（赤塚 2001）。有縁有脚石皿の出土率は東北地方で高いため、広い意味では東北地方の影響とみることができるとは考えられるが、掃き出し口や肩部をもつ石皿は東北地方に分布していないようなので、関東・中部地方における地域性も有すると考えられる。有縁有脚方形石皿は出土例が少なく、例えば藤岡神社遺跡（栃木県下都賀郡藤岡町）では2,019点のうち方形・隅丸方形に分類されるものが105点で、このうち有縁有脚は3点のみである（手塚ほか 2001）。このほか、平面の形状不明で有縁有脚であるものは4点とされる。この分類からも基本的に有脚石皿は方形または隅丸方形を呈すると考えられる。出土したすべての石皿が同時期には属さないものの、有縁有脚方形石皿の出土例の少なさがうかがわれる。

有脚石皿の出現に関しては前述のように東北地方の中期前葉とされるが（赤塚 2001：146）、後期以降という指摘もある（植田 1998：26）。掃き出し口と肩部をもつ石皿の時期は中期前葉から後期前半と考えられるが、関東地方に限定すると後期以降の可能性が高いだろう。上條（2007）によればこのタイプは中期後葉に東北地方で出現し、後期前葉に関東・中部地方に分

布が拡大するという。このうち95%以上が後期前葉に属し、特に堀之内Ⅰ式期に増加するとされる（上條 2007：39）。貝の花貝塚例や赤山遺跡例が後期前葉に属するとされるので、関東地方の事例のほとんどが後期前葉であると考えてよいだろう。したがって、当貝塚出土石皿の時期も縄文時代後期前葉と考えるのが妥当であろう。

関東地方の有脚有縁石皿を類例として検討してきたが、四隅に突起をもつタイプの石皿とは異なる特徴を本貝塚出土例は有している。例えば、掃き出し口と肩部をもつ形態であれば、脚部付近には突起が作り出されるのが通例であるが、本貝塚例の縁はほぼ直線である。また、当貝塚出土例は脚部を有する部分であるが突起がみられず、脚部が大型で通常の掃き出し口をもつ石皿よりも高く製作されている点も異なっている。また、中妻貝塚の石皿に赤色顔料が付着していたことを考慮すると、方形石皿の用途が食料加工に限定されないことも考えられる。

（川島）

3.2. 石棒

今回の調査でBトレンチから出土した石棒頭部の断面は扁平な形をとり、片側が薄くなっている（第8図17）。頭頂部に沈線がめぐらされ、頭側面に縦位の沈線が刻まれている。頭側面の沈線はI字文を意識したものであろうか。頸部には段が設けられ、被熱や破損部における再調整の痕跡はない。材質は粘板岩と考えられる。頭頂部にめぐる沈線は有文石棒と共通するが、頭頂部の形態が丸くならない点は異なる。

当貝塚出土石棒には文様が少ないため判断が難しいが、「乙女不動原北浦石剣」の範疇に含まれるであろう（後藤 1986：48）。このタイプは鈴木木の「小野型石棒」に対応し、文様は主にI字文で構成され、分布域は東関東ととらえられている（後藤 1986：48，鈴木 2002：35）。粘板岩を典型的な石材とする「小野型石棒」にはよく研磨されていても文様の彫り込みが浅い粗製品が含まれるとされる（鈴木 2002：33）。頭部が隅丸方形に近い形状を呈するのは小野天神前遺跡例（茨城県常陸大宮市）や金洗沢遺跡（茨城県水戸市）例にみられる。これらは体部も無文となったり、粗製となる場合が多いようだ。頭部の断面形態で片側が薄くなる例も平三坊貝塚出土例と共通している。時期は晩期中葉が中心とされており（後藤 1986：58）、頭側面の沈線がI字文を意識したものであるとするならば、当資料は晩期に属すると考えられる。頭部に施される文様から推定される年代は、「X字文が後期後葉から晩期前葉、二重X字文や連続X字文・対向三角文晩期前葉、I字文が晩期前葉～中葉、複雑化したI字文が晩期中葉」で、「省略化されたI字文が晩期中葉から後葉」とされている（角田 1997：16）。当貝塚出土石棒が「小野型石棒」に含まれ省略的なI字文が施されているとすれば、縄文時代晩期に属すると考えられる。

茨城県内出土石棒の石材採取地の推定によると、上の代遺跡の4点中3点、本覚遺跡の3点、泉坂下遺跡の3点、上高津貝塚の4点は阿武隈山地南端の鮎川層のものであった（鈴木・柴田 2005：74-75）。平三坊貝塚から比較的距離の近い上高津貝塚でも鮎川層から得られた石材が

用いられたとすると、当貝塚出土石棒も同様の石材である可能性があろう。石材の産地として当貝塚から近いのは茨城県北部であり、そこで産出した石材が用いられたと考えられる。

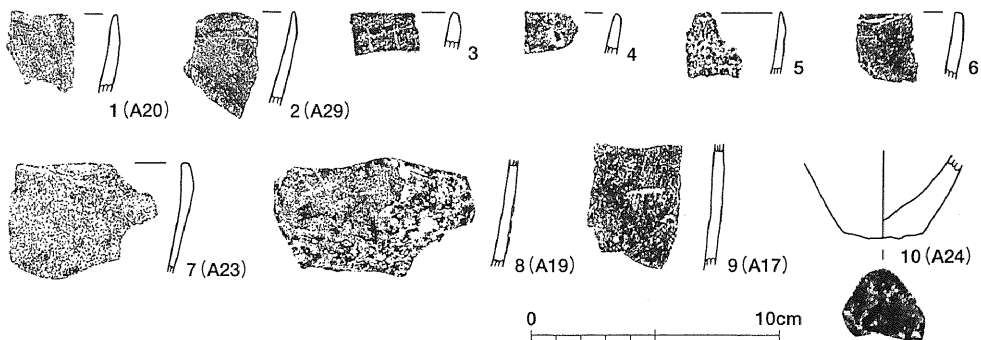
(川島)

3.3. 製塩土器

出島半島地域ではいくつかの遺跡において製塩土器が出土することが知られており、当貝塚では以前にも製塩土器が採集されている（常松 1997）。昨年度の表面採集資料にも製塩土器の破片が若干含まれていたが、今回の発掘調査においてはAトレンチより比較的多数出土し、Bトレンチからもわずかに出土した。当遺跡出土の製塩土器には被熱痕が認められ、外面の剥離が観察される破片もある。口縁部の調整技法をみると、霞ヶ浦南岸の製塩遺跡にみられるような明瞭なヘラ切りは存在せず、指頭押圧による調整が多い。このような調整は製塩土器が多出する霞ヶ浦南岸ではなく、上高津貝塚（茨城県土浦市）や部室貝塚（同県小美玉市）のような霞ヶ浦沿岸の台地上の遺跡においてみられるようである。

Aトレンチからは口縁部4点、胴部17点が出土した。口唇部形態は尖唇が多く、1点のみヘラ切りのような調整が施されている。胴部片は7点に剥離がみられ、1点は被熱による赤変がおこっている。胴部片のうち4点は第1号土坑より出土した。Bトレンチからは口縁部4点、胴部4点が出土した。第15図5のみピット3より出土し、ほかは1・2層から出土した。

以下に、製塩土器と考えられる資料を紹介する。第15図1・2・7～10はAトレンチより出土しており、第2図の番号と対応する。3～6はBトレンチより出土している。1・2は尖唇状を呈する口縁部片である。両者とも口唇部には指頭による調整が認められる。胴部外面はヘラケズリが施され、内面はナデである。2の胎土には灰白色の砂粒が含まれる。3・4は口唇部上面にナデが施される口縁部片である。3の内面下半は赤化している。4は内面のナデによって口唇部内側が一部盛り上がり、外面には粘土屑の付着が認められる。5は尖唇状の口縁部片であり、外面が剥離している。6・7は口唇部上面がヘラ切りされている口縁部片であ



第15図 製塩土器

る。6は口唇直下に折り返しのような痕跡が認められ、口唇直下までヘラケズリが施される。7の口唇部断面は尖唇状を呈し、上端のみヘラ切りが施される。口唇部にはナデが施され、胴部外面・内面の調整もナデである。胎土には砂粒を多く含み、1～2mmの赤色砂粒を含む。8は外面の剥落が著しい胴部片であり、一部薄い紫色の変色が認められる。胎土には砂粒を多く含み、1～2mmの赤色砂粒を含む。外面・内面ともにナデが施される。9は外面にヘラケズリが施される胴部片である。胎土には1mmほどの赤色砂粒が含まれる。外面の剥離や変色はみられないが製塩土器であろう。10は平底の底部片であり、底部径は3.5cmである。外面は粗くヘラケズリがなされ、底面も不整形で平坦ではない。内面にはナデが施される。底面の一部に変色が認められる。

では、周辺遺跡出土製塩土器との比較をおこない、当貝塚出土資料の位置づけを探ってみよう。まず、上高津貝塚C地点では91点の口縁部、55点の底部が出土した（福田ほか 2006）。特に4点の完形の製塩土器が出土しており、出土位置や伴出した土器との関係から晩期前葉と考えられる。これら完形の製塩土器の中では1点のみ底部付近に被熱痕があるものの、ほかの3点は小型で被熱痕や器面の剥離が認められない。これらはすべて、口唇部は指による調整で尖唇状を呈し、外面の調整はヘラケズリが施されている。したがって、口唇部調整がヘラケズリでなくとも晩期に属する場合があるようである。また、破片資料には被熱痕や剥離が認められており、鹹水の煮沸に用いられたことは確かであろう。また、上高津貝塚ではB地点からも口縁部片で計303点の製塩土器が出土している（Akazawa 1972）。ほとんどの口縁部は水平に調整されるが、いくつかの口縁部片は指によって成形され尖唇状となるという。図から判断するとヘラ切りの資料が多いが、ほとんどの口唇部には指による成形の跡が確認できる。外面の調整はヘラケズリであり、器面の剥離痕をもつ破片もある。底部は平底で木葉痕のような圧痕や網代痕が残されるものもある。B地点出土の製塩土器口縁部片185点を観察したところ、ヘラ切りのみのものが25.4%、指による調整の跡が残るヘラ切りが22.2%、指のみによる調整が39.4%、その他が13.0%という結果であった。典型的なヘラ切りも存在するが、B地点においても指による調整が主体をなしているようである。

部室貝塚ではB貝層やその西側から採集されたと考えられる製塩土器が報告されている（宮内ほか 2005）。縄文後期後葉から晩期中葉の土器とともに15点の製塩土器が図示された。口縁部4点のうち1点は調整が粗く不整形を呈し、残りの3点にヘラ切りが施されている。胴部片には器面の剥離が認められる。底部の形態は平底4点と尖底1点である。

これら台地上に立地する遺跡に対し、製塩が集中的におこなわれたと考えられる霞ヶ浦南岸の遺跡においては、口唇部調整にヘラ切りが最も多く用いられている。広畑貝塚（茨城県稲敷市）においては、安行3a式期の層から出土した製塩土器に水平なヘラ切りが、安行3b式期には内傾するヘラ切りが施される傾向が指摘されている（藤本 1988）。金子（1979）が報告した製塩土器を観察したところ、同様の傾向がうかがえた。姥山Ⅱ式が出土しはじめるAトレンチ4層からヘラ切りの口縁部が増加しており、姥山Ⅱ式が主体となる2・3層では部分的にでも

ヘラ切りが施される口縁部は80%を超えている。広畑貝塚の製塩土器の特徴は指により成形される尖唇状の口縁部が非常に少ないということである。これは同じく製塩遺跡である法堂遺跡（茨城県稲敷郡美浦村）においても観察される（戸沢・半田 1966）。指による押さえとナデの調整をもつ口縁部片は製塩土器口縁部全体の14.7%となっている。やはり口縁部調整の主体となるのはヘラ切りであり、部分的にでもヘラ切りが施された口縁部片は75.3%に達する。法堂遺跡の時期は晩期が中心であることから、霞ヶ浦南岸の製塩遺跡においては晩期以降にヘラ切り調整が多く用いられていたと考えられる。

平三坊貝塚Aトレンチ出土の製塩土器は主に後期の土器とともに出土している（第2図）。この層位では部分的に攪乱を受けている可能性はあるものの、Aトレンチの中でも土器が集中する部分であるため、これらの土器はある程度原位置を保っていると考えられる。製塩土器と同じレベルで出土している土器は後期後半から晩期初頭が主体となっている。Bトレンチの製塩土器はAトレンチよりも時期的に新しい可能性はあるが、ヘラ切りの資料は1点のみであり時期的な差は明瞭ではない。ただ、上高津貝塚出土の完形製塩土器は晩期前葉に属すると考えられるが、ヘラ切りが施されているわけではないので注意を要する。

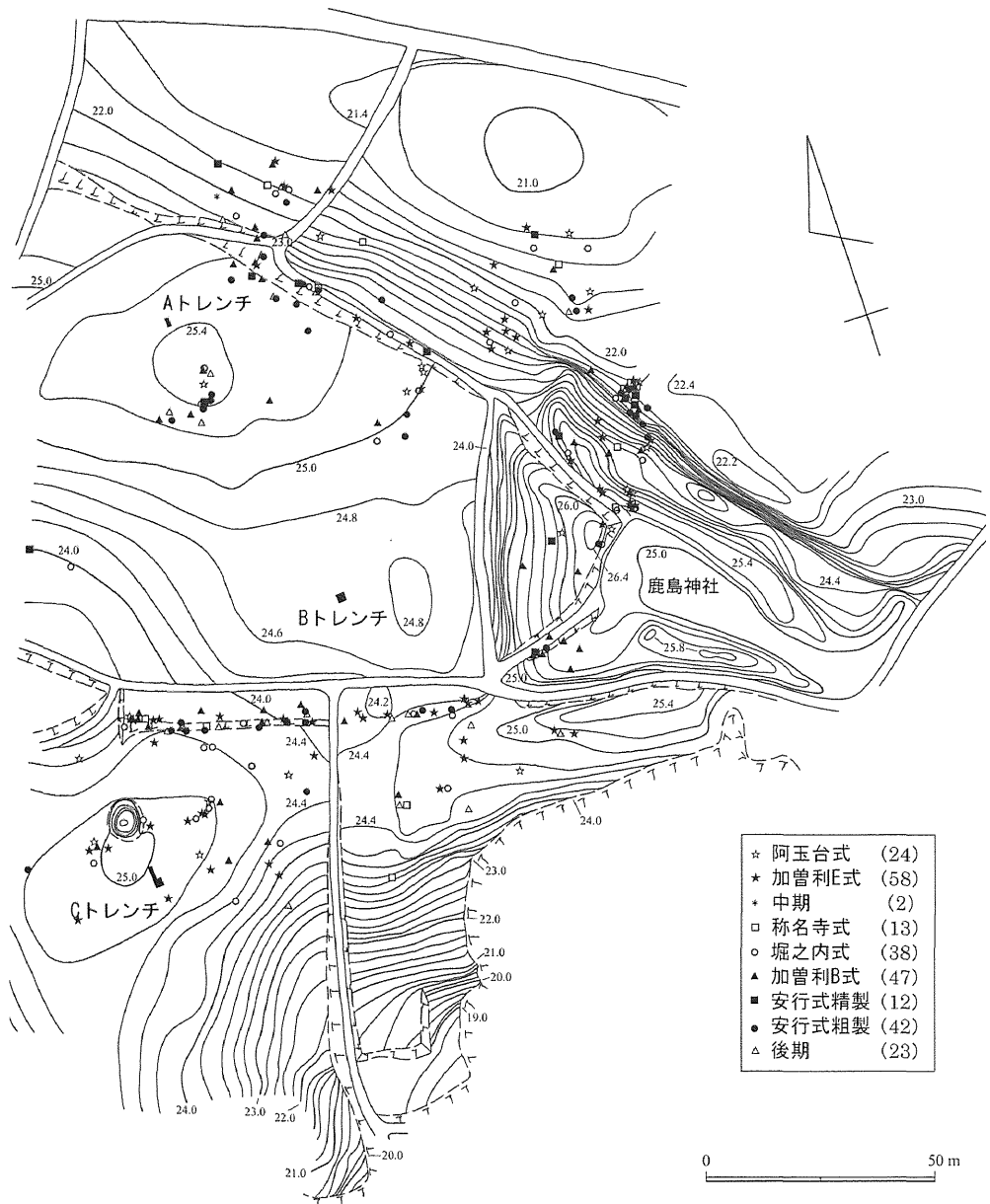
口唇部調整技法の相違は「外周縁地帯」と「中核地帯」の差として解釈され、正網遺跡（埼玉県富士見市）の資料が安行3c式に属するとされたことから尖唇状の口縁部は「外周縁地帯」において晩期前葉から中葉まで存続し、法堂遺跡などの「中核地帯」においてはヘラ切りの口縁部が安行3b式ごろに展開したととらえられた（関ほか 1983）。属する時期は明確でないものの、大宮台地など内陸部の遺跡から出土する製塩土器は尖唇状の口縁部をもつものが多い（本田 2000）。製塩土器の口縁部形態は遺跡や地域ごとに変化が異なる可能性があり、それぞれに詳細な検討を要するようである。当貝塚Aトレンチからの製塩土器は伴出した土器が示されたという点で、貴重な資料であると考えられる。

（川島）

4. 調査の成果と考察

今回の調査結果をまとめてみると、Aトレンチでは縄文時代後期を主体とする土器が出土し、後期後半と考えられる土坑も検出されている。Bトレンチからは晩期後半までの土器が出土しており、晩期の包含層が検出された。ここで検出された粘土を多く含む第1号土坑の時期は不明である。Cトレンチでは縄文時代中期を中心とする土器が出土し、袋状土坑も検出されている。また、中世と考えられる方形の粘土貼り土坑も検出された。なお、A・Bトレンチからも土師器や須恵器の破片が出土しており、縄文時代以降も当貝塚の範囲が継続的に利用されたことを示している。

これらの結果からは、昨年度の表面採集では明確にはならなかった地点ごとの時期差が想定されよう。各地点の時期差についてはすでに述べられており（川口 2001）、実際視覚的には時期差が認められるものの、より客観的な方法で確認しようとするとは明確な結果を得ることはで



第16図 表面採集遺物分布図（川島2007：第4図に加筆・修正）

きなかった（川島 2007）。今回の結果を加味し，昨年度の遺物分布図を再検討してみよう（第16図）。まず，Cトレンチでは縄文時代早期後葉から前期前半の繊維土器が出土しており，本貝塚の中でも古い様相を示している。出土した土器の主体は中期中葉であり，表面採集の結果とほぼ一致している。Cトレンチ付近や遺跡南東部など台地の南側縁辺部には中期から後期前葉の土器が散布しており，この時期の遺構分布が予測される。この地点のやや北側になると，

中期の土器に混じり後期中葉以降の土器が分布するようになる。遺跡東側に位置する鹿島神社の境内では後期中葉以降の土器が目立つようになる。Aトレンチの付近でも後期中葉以降の土器が散布しており、西側を欠くほぼ楕円状の分布が読み取れる。遺跡北西側の斜面では中期からの土器が採集されるが、遺跡南側とは異なり後期中葉以降の土器も分布している。また、鹿島神社北側の斜面では中期の土器が目立つものの、晩期前葉の土器も数点採集されている。

基本的な時期的傾向としては、遺跡の周縁部には中期から後期前葉の土器が分布し、その内側に後期中葉以降の土器が分布するとみることができる。また、窪地に相当するBトレンチからは晩期の土器が出土しているので、新しい時期の土器ほど遺跡の中心寄りに分布すると考えられる。この傾向は霞ヶ浦沿岸のみならず、下総台地や大宮台地の縄文時代後晩期遺跡に共通しており（川島 2008）、霞ヶ浦周辺における縄文時代後・晩期集落景観の復元が今回の成果のひとつといえよう。

今回の調査の目的は盛土の検出であったが、平三坊貝塚においては典型的ないわゆる「環状盛土遺構」が存在した可能性は低いと考えられる。その理由は、高まり部分における土層の堆積が薄いこと、中央窪地と推定されたBトレンチにおいてソフトローム状の土層が確認されたこと、が挙げられる。調査期間の制約もあったが、Bトレンチはより深く掘り下げてみる必要があるかもしれない。現地形において高まりのようにみえたCトレンチでは中期の遺物が主体をなし、また後期の遺構は検出されなかった。耕作によって高まり部分が削平された可能性はあるが、もともとの堆積自体が厚くなかったとも推定される。

しかしながら、盛土遺構を保有しないとしても平三坊貝塚はほかの縄文時代後・晩期集落との共通点を有している。先に述べた遺物・遺構の分布状況や、遺跡中央に窪地を有する点がまず共通点として挙げられる。このほか、環状盛土遺構を保有する遺跡の特徴のひとつに遺跡の継続期間の長期性がある。今回の発掘によってBトレンチから前浦式土器や晩期後葉の土器が出土したことは、平三坊貝塚の継続期間を示すものとして重要であろう。生産用具のみならず祭祀遺物である石棒も出土しており、遺物の種類も豊富であると推測される。これらの共通点を考慮すると、平三坊貝塚と「環状盛土遺構」保有遺跡との相違は、「環状盛土遺構」を保有しないという点のみにあらわれるようである。もし平三坊貝塚において環状盛土遺構が存在しないのならば、平三坊貝塚は環状盛土遺構の分布域の境界付近に立地したと考えられる。そうだとすれば、古鬼怒湾南岸を境として集落景観が異なる原因を探求する必要性が生じてくる。住居の壁土を盛土の主要因とし盛土部分に居住空間を求めるのならば（阿部 1996・2007）、地域によって住居の構造や構築方法が異なったことになる。今後はこの点にも注意をしながら議論を進める必要があろう。

（川島）

謝辞

地権者の佐賀匡夫氏、大久保隆男氏、斉藤文男氏には発掘調査へのご快諾をいただき、調査中は宮嶋新右衛門氏にも昨年度に引き続きご協力をいただいた。発掘作業には三宅 裕准教授のほか本学卒業生の亀井 翼、菊地淑人、藤山和紀、森田義史の参加を得た。また、発掘調査時や報告に際して以下の方々にご教示をいただいた。末筆ながら記して感謝申し上げる。石橋 充、伊藤千洋、小山映一、齋藤瑞穂、諏訪 元、千葉隆司、長谷川敦章、宮内良隆（50音順・敬称略）。なお、本稿は平成19年度高梨学術奨励基金研究助成（研究課題：狩猟採集社会の複雑化と経済的基盤）による成果の一部である。

引用文献

- Akazawa, T. 1972 Report of the investigation of the Kamitakatsu shell-midden site. Bulletin 4. The University Museum. The University of Tokyo. Tokyo.
- 赤塚 亨 2001 「脚付石皿と中高石皿－関西大学博物館所蔵資料の紹介に関連して－」『関西大学博物館紀要』第7号 関西大学博物館 137-158頁
- 阿部芳郎 1996 「『縄文のムラと『盛土遺構』：『盛土遺構』の形成過程と家屋構造・居住形態』『歴史手帖』第24巻第8号 名著出版 9-19頁
- 2007 「縄文後晩期の集落構造－『谷典型環状遺丘集落』と『谷面並列型遺丘集落』の占地と展開』『環状盛土遺構』研究の現段階－馬場小室山遺跡から展望する縄文時代後晩期の集落と地域－』『馬場小室山遺跡に学ぶ市民フォーラム』実行委員会 57-77頁
- 植田文雄 1998 「縄文時代における食料獲得活動の諸相－石皿の分布からみた発展段階の認識と復元への展望』『古代文化』vol.50 古代学協会 25-38頁
- 江原 英 1999 「寺野東環状盛土遺構の類型－縄紋後・晩期集落の一形態を考える基礎作業』『研究紀要』第7号 （財）栃木県文化振興事業団埋蔵文化財センター 1-56頁
- 沖松信隆 2005 「縄文時代後・晩期集落における中央窪地の形成について－千葉県内の事例を中心に－』『研究紀要』第24号 （財）千葉県文化財センター 25-58頁
- 金子裕之 1979 「茨城県広畑貝塚出土の後・晩期縄文式土器』『考古学雑誌』第65巻第1号 日本考古学会 17-71頁
- 上條信彦 2007 「縄文時代石皿・台石の研究』『古文化談叢』第56号 九州古文化研究会 25-54頁
- 川口武彦 2001 「Ⅱ．縄文時代』『霞ヶ浦町遺跡分布調査報告書－遺跡地図編－』霞ヶ浦町教育委員会・筑波大学考古学研究室 27-37頁
- 川島尚宗 2007 「平三坊貝塚測量報告－環状盛土遺構検出の実践と課題－』『筑波大学 先史学・考古学研究』第18号 筑波大学人文社会科学研究科歴史・人類学専攻 53-67頁
- 2008 「霞ヶ浦周辺地域の縄文時代後・晩期遺跡と『環状盛土遺構』』『物質文化』第85号 物質文化研究会 33-52頁
- 後藤信祐 1986 「縄文後晩期の刀剣型石製品の研究（上）」『考古学研究』第33巻第3号 考古学研究会 31-60頁
- 鈴木素行 2002 「ケンタウロスの落とし物－関東地方東部における縄文時代晩期の石棒について－』『婆良岐考古』第24号 婆良岐考古同人会 15-38頁
- 鈴木素行・柴田 徹 2005 『本覚遺跡の研究－関東地方東部における縄文時代晩期の石棒製作について－』鈴木素行
- 関 俊彦・鈴木正博・鈴木加津子 1983 「大森貝塚出土の安行式土器（三）」『史誌』19 大田区史編さん委員会 14-60頁
- 常松成人 1997 「古鬼怒湾「製塩遺跡」を中心とした安行式集団の動態』『茨城県史研究』茨城県立歴史館

22-42 頁

角田信也 1997 「関東地方における細型石棒の文様と位置付け」『東国史論』第12号 群馬考古学研究会 1-23 頁

手塚達也ほか 2001 『藤岡神社遺跡』栃木県教育委員会・（財）とちぎ生涯学習文化財団

戸沢充則・半田純子 1966 「茨城県法堂遺跡の調査－「製塩址」をもつ縄文時代晩期の遺跡－」『駿台史学』第18号 駿台史学会 57-95 頁

福田礼子・塩谷 修・石川 功ほか 2006 『上高津貝塚C地点－史跡整備事業に伴う発掘調査報告書－』土浦市教育委員会

藤本弥城 1988 「茨城県広畑貝塚の晩期縄文土器」『考古学雑誌』第73巻第4号 日本考古学会 1-35 頁

本田昭宏 2000 「第7章第2節 大型炉と製塩」『上高津貝塚E地点－史跡整備事業に伴う発掘調査報告書－』土浦市教育委員会 70-79 頁

宮内慶介・古谷 渉・吉岡卓真 2005 「茨城県部屋貝塚採集の縄文後晩期の土器」『玉里村立史料館報』第10号 玉里村立史料館 89-117 頁